

報 告

第31回医学情報サービス研究大会 (MIS31) 参加記

谷口裕美子

I. はじめに

医学情報サービス研究大会は、医学、薬学、歯学、看護学、保健など、生命科学関連領域にかかわる情報サービス関係者のために、知識の共有と交流の場を提供する研究会である。31回目の大会は2014年7月26日から2日間にわたって、愛知県がんセンター中央病院国際医学交流センターで開催された(図1)。参加総数は249名で、地方開催ではまずまずの参加人数だった(過去の最多人数は355名、最少人数は95名)。



図1 MISの会場出入口

大会は口頭およびポスターによる研究発表を中心に置き、発表者と聴衆(聴くだけでなく、質問や意見も言う)が互いに学べる場となっている。

2日分のプログラム数は膨大で、話のほとんどは「なにがなんだかよくわからない」状態の

まま終わってしまった。が、その中でも図書業務に役に立ちそうなもの、今後の自分に生かせそうなものをピックアップして紹介していこうと思う(図2)。



図2 口頭発表風景

II. 役立ちトピック

1. 蓬左文庫と所蔵の医学書・本草学書

名古屋の尾張徳川家の旧蔵書を中心とする古典籍を所蔵する公開文庫。文庫(図書館)の成り立ちと変遷、現在のあり方について学ぶ。図書館業務において館の特色をいかに出していくか、アピールしていくかは大事だと思った。自分の勤める病院の特色(地域医療支援病院・がん診療連携拠点病院)にあわせた選書の提案や、コーナー作りなど、今後の課題にしていこうと思った。

2. “医療情報”から“医療・介護情報”へ

長崎市立図書館の市民のニーズに合わせた情報提供の取り組み。利用者のニーズに介護情報が増えてきているという現状を踏まえて。病院

図書館は介護情報を置くのではなく、地域医療連携室や公共図書館と連携して、情報（どこにあるか）を提供していけたらよいと思った。

3. リンクリゾルバ導入後の現状と課題

高いお金をかけてリンクリゾルバを導入していても、文献にたどり着けず、Google や Google Scholar からたどり着ける場合があるということ。ナビゲートシステム自体の向上と、Open Access 側のわかりやすい公開が課題であるとわかった。図書館員としては文献取り寄せ依頼のチェック時に、Google や Google Scholar は外せないと思った。

4. CiNii API を用いた蔵書比較方法の提案

CiNii のデータベースにアクセスして図書館ごとの所蔵を調べるというもの。医学部のある 79 の大学図書館を対象とし、所蔵館数の多い順にタイトルを並べた表を作成されていた。大学だけでなく医学系、薬学系、看護系、専門学校や機関も入れたら面白いし、選書の参考になるかとも思った。……がそれだけの SQL を書くのは大変だとも思った。

5. 長崎市立図書館の地域における小児医療へのかかわりについて

小児在宅医療・小児がんを例にということで、長崎市立図書館と長崎大学病院と長崎県医療政策課が連携して、図書室で小児在宅医療向けの図書の展示とイベントを開催。病院図書館からの連携について考えさせられたし、一回限りのイベントでなく継続の大切さも考えさせられた。また、会場だけの展示でなく web 上での情報公開、広報も必要だと思った。

6. エンベディッド・ライブラリアンを目指して

千葉県済生会習志野病院図書室の試み。認知度・利用度の低い図書室活性化を図るために、ビジネスフレームワークを活用した 10 年計画。病院側に働きかけ、予算や場所の確保をする。DB や EJ 導入で管理業務から利用者サービス中心に移行する。利用者のニーズや質問に常に応える。そして 1 日数人の閲覧数の図書室から 100 人訪れる図書室への変貌を成し遂げる（こ

こまでで 3 年間の第一フェーズ）。とにかくすごいと思った。同じ病院図書館司書として見習う点が多々ある。エンベディッド・ライブラリアンというのは利用者とともに活動しつつ情報サービスしていく図書館員のことで、今後必要になっていくのではないかと思った。また、エンベディッド・ライブラリアンについては下記の記事が解りやすかった。

<http://current.ndl.go.jp/ca1751>

7. あおぞら医療相談 & レファレンスの試み

川崎市立井田病院図書室の試み。患者用サロン兼図書室の開始や、あおぞら医療相談での司書のレファレンスなど、医師・看護師・司書が連携して患者や地域へのサービスにかかわるところがよいと思った。病院図書館のアピールにもつながると思った。

8. 山崎茂明先生に聞く

愛知淑徳大学の教授。医学図書館の編集長や、医学情報サービス大会の代表幹事を長年務めてらした方である。トークショー形式で先生の経歴をたどりながら、研究発表や論文執筆、図書館員の可能性などを聞いた（図 3）。



図 3 トークショー風景

9. Research & Writing の世界へようこそ

日常業務でのきづきや考えを元に調査研究を行い論文にするというのが、今の図書館員に必要なスキルらしい。論文なんて縁がないなと思いつながら聞いていたが、専門職である図書館員が自らの専門性を高める方法の一つと言われて

なるほどと思った。気になることを調べてみるのも大事であるし、身近なことから始められたらよいと思った。

10. ポスターセッション

ポスターセッションは、ポスター制作者がポスター前で発表し、参加者が質問したり意見を言ったりする。病図協からは武田さんがKITOCatについての発表をした。他に赤十字病院のリポトリや、長崎市立図書館のブックリスト、医療を学ぶ人のためのEBMワークショップなど、興味深いものがたくさんあった。

11. 図書室見学

会場になった愛知県がんセンター中央病院の図書室の見学もさせていただいた。6万冊弱の蔵書（うち6割は製本雑誌）や、パソコン画面、新刊の閲覧コーナーなどを見せてもらった。図書室イントラは雑誌の新刊案内や、所蔵リストや、データベースの使い方やリンクなど、DB化されていく図書館業務に参考になることがたくさんあった。ILLに関しては最近EJ化のせいで依頼が減ったのでどんどん依頼してほしいとのこと。名前の順と所蔵の多さでつい頼ってしまいがちな愛知県がんセンター。いつも恐縮しながら依頼していたので、そう言ってもらえて気が楽になったのは私だけじゃないはず。

Ⅲ. おわりに

他にもいろんなプログラムがあった。

プログラムはMIS31のサイトに載っているのでそちらを参照していただきたい。

<http://mis.umin.jp/31/program/index.html>

私が気になったのは以上だが、他の方が聞いたら別のものが心に響いたり、きづきがあったりするかと思う。来年は、皆にも参加していただきたい。いろんな学びを自身で吸収して、またそれをアウトプットしてほしい。

MISの参加費は4,000円。周辺にご飯を食べに行けるような場所もないので会場の弁当を購入すると2日分で2,000円。懇親会は4,000円。さらに宿泊代、交通費がかかり、かなりの出費になる。それを安いと見るか高いと見るかは人それぞれだと思う。私自身、内容はとても良いとは思ったが、出費自体は大きいし痛かった。でも、お金かけた分しっかり勉強していこうと思ったし、集中して聴くこともできた。人間、身銭を切ったものに対しては真剣になるものだ。

もちろん公費で行った人も助成（今回私は交通費を病図協から助成を受けた）を受けて行った人も、得た知識を自機関に持って帰って還元する義務がある。自分にどれだけお金がかかっているか、自分がいかに図書館員としての自覚と自負をもって行動するかが大事だと思う。

JMLAの医学図書館員基礎研修会の時に聞いた話だが、人は学んだことを20%くらいしか覚えられない。しかし、人に教えるつもりで聞くとそれが90%までアップすることができるという。

MISの理念は「Learning from each other!」（図4）。互いに学ぶのは会場だけにとどまらず、あらゆるところに広めていって、それがまた互いの発展につながればいいと思う。



図4 MISの理念の横断幕